

第40回 日本ケルト学会 研究大会 プログラム



日時 2020年11月29日(日)

Zoomによるオンライン開催

開催方法

- ✦ 研究発表、フォーラム・オンの発表は、大会当日までの一週間(11/21~11/29)、Google Driveに発表レジュメと発表音声音源を会員限定で公開します(ダウンロード不可)。
- ✦ 大会に参加される方は、大会前に発表レジュメおよび発表音源をあらかじめ視聴してください。
- ✦ 大会当日は、研究発表については質疑応答のみ、フォーラム・オンは討議のみを、Zoomで行います。
- ✦ 研究発表の質疑応答時間は各20分です。フォーラム・オンの討議時間は1時間です。
- ✦ 大会当日、総会が開催されます。総会資料もGoogle Driveに保存し、大会までの一週間会員限定で公開します。総会前に資料をご覧ください。
- ✦ Google DriveおよびZoomへのリンクは、大会一週間前に会員用メールリストにてお送りします。
- ✦ 大会参加費は無料です。

第40回 日本ケルト学会 研究大会 プログラム

11月29日(日)

12:30~ Zoom 開室
13:00 開会の辞

研究発表(各発表レジュメおよび音源)はGoogle Driveにて限定公開します。事前にご覧ください。

13:00~13:20 研究発表1 質疑応答
現代ウェールズ語において「-される/されたN」はいかに表されるか
司会 小池 剛史 発表者 浅野 千咲

13:20~13:40 研究発表2 質疑応答
ケルト美術工芸品の彩色に関する一考察(縄文・弥生との比較を交えて)
司会 梁川 英俊 発表者 秋山 肇

13:40~14:00 休憩

14:00~14:20 研究発表3 質疑応答
In Cath Cathardalに於ける叙事詩的直喩の創造的模倣
司会 辺見 葉子 発表者 長島 真以於

14:20~14:40 研究発表4 質疑応答
J. R. R. Tolkienの「不死の楽園」再考
司会 米山 優子 発表者 辺見 葉子

14:40~14:50 総会
(総会資料はGoogle Driveにて限定公開します。事前にご覧ください。)

14:50~15:00 休憩

フォーラム・オン:各発表レジュメおよび音源はGoogle Driveにて限定公開します。事前にご覧ください。

15:00~16:00 フォーラム・オン 討議 全体司会 梁川 英俊

発表1 ブルターニュとケルト的連帯 発表者 梁川 英俊

発表2 ウェールズのアイステズヴォッドにおける「汎ケルト主義」 発表者 森野 聡子

発表3 1880年代~1890年代のスコットランドにみる「汎ケルト主義」の動向とスコットランド文芸復興運動 発表者 米山 優子

16:00 閉会の辞

ケルト的連帯:大陸と島嶼から見るその歴史的背景

The Pan-Celtic Movements among the 'Modern' Celts: Their Historical Background from the Continental/Insular Perspectives

「フォーラム・オン」では、数年前から「ケルト」概念の見直しについて継続的に検討してきた。昨年は「ルナン、アーノルド、イエイツ:近代ケルト概念の源流を探る」と題して、近代的ケルト概念の源流となったE. ルナン、M. アーノルド、W.B.イエイツの系譜を辿った。議論の出発点となったのは、「ケルト人」の概念の根本的な変化である。ルナン以前の時代においては、「ケルト人」と言えば大陸に居住した「古代ケルト人」のことであった。それに対して、ルナンは今日のケルト諸地域に住む「ケルト語話者」を「ケルト人」と呼んだ。そこには、「言語」を同じくする人間集団を一つの「人種」として捉え、彼らが同じ精神的・気質的同一性、すなわち「精髓」を共有するという当時の文献学的思考があった。19世紀半ばに登場したこの思考は、次第に「ケルト語話者」に「古代ケルト人」とは異なる「近代ケルト人」としてのアイデンティティを与えることになった。この傾向は、彼らの間に民族的自覚を促し、「ケルト的連帯」の動きを芽生えさせることになる。

今回のフォーラム・オンでは、特に19世紀を中心にして、時に「汎ケルト主義」(Pan-Celtism)とも呼ばれるこの連帯の動きを、ブルターニュ、ウェールズ、スコットランドの各地域から考察してみたい。それ以外のケルト諸地域、とりわけアイルランドについては、各発表者が各々の立場から仮説を提出する予定である。ディスカッションの際には、プロパーの積極的なご教示をお願いしたい。

議論を活性化させるために、ひとつの作業仮説を掲げておく。ひとくちに「ケルト的連帯」と言っても、連帯に積極的な国／地域ばかりではない。ある国／地域が「ケルト」というアイデンティティを必要とするのは、それが対外的ないしは国内的に有利に働く場合のみである。当然ながら、そこに利点を見いだせない国／地域は「ケルト」には固執しない。ケルト諸地域の中で、積極的に「ケルト」を標榜してきたのはアイルランドとブルターニュであり、他のケルト諸地域は連帯にさほど積極的ではなかった。ディスカッションでは、この仮説の有効性をテーマの一つとしたい。

(文責・梁川英俊)

フォーラム・オン発表 1

ブルターニュとケルト的連帯

La Bretagne et l'union celtique

発表者 梁川 英俊

ブルターニュの「ケルト的連帯」の歴史は古い。というよりも、そもそも 19 世紀にブルターニュが「ケルトの土地」を自覚したときから、その自覚は海の向こうのウェールズとの連帯と不可分に結びついていた。そしてこの伝統は、今なおブルターニュのアイデンティティの一部を成している。つまり、この地域はフランス西部のランズエンド(penn ar bed)であると同時に、英仏海峡と大西洋に向けて開かれた海外への門戸なのである。ブルターニュを特徴づけるのは、この「辺境性」と「先進性」の共存である。そこは伝統文化が色濃く残る貧しい農村地帯である一方で、ロリアンのインターケルティック・フェスティバルなどの国際的な催しが行われるグローバルネットワーク(=「ケルト諸語地域」)の重要な一角でもあるのである。

本発表では、こうしたブルターニュの「ケルト的連帯」の歴史について、まずラ・ヴィルマルケ(1815-1895)の著作や活動から、特に誤解の多い『バルザス＝ブレイス』を中心に検証し、その後 19 世紀の「汎ケルト主義」のマニフェストとも見なされるシャルル・ド・ゴール(1837-1880)の『19 世紀のケルト人』(1864)の内容を辿りつつ概観してみたい。そのうえで、時間があれば、アイルランドとブルターニュの比較を中心に、ケルト概念とカトリシズムの関連という問題にも踏み込んでみたい。

フォーラム・オン発表 2

ウェールズのアイステズヴォッドにおける「汎ケルト主義」

Pan-Celticism in Welsh Eisteddfodau

発表者 森野 聡子

ローマ帝国以前の西ヨーロッパの住民とその言語を指す名称として「ケルト」が導入されたのは 18 世紀初めのことだが、そこから即、ブリテン諸島およびブルターニュのケルト諸語地域に、起源を一にする民族としての連帯意識が誕生したわけではない。特に、「ブリテン島最古の民」という誇らしいセルフ・イメージをもつウェールズ人のアイデンティティ・ポリティクスに「ケルト」が果たした役割は、ブルターニュやアイルランドほどではなかった。

そんななか、ウェールズにおいて「ケルト的連帯」の受け皿となったのが、18 世紀末に「創出」されたゴルセツと、その祭典に擬せられることになるアイステズヴォッドである。発表では、しばしば汎ケルトの大会と評されるカムレイガジオン協会主催の 1838 年のアイステズヴォッド、1867 年にブルターニュで開催された「ブルトン・アイステズヴォッド」、そしてアイルランドのフルニエラによってケルティック・コンGRESS呼びかけの場に活用された 1890 年代末のアイステズヴォッドを取り上げ、ウェールズにおける汎ケルト主義の受容と展開について考察したい。

1880年代～1890年代のスコットランドにみる「汎ケルト主義」の動向と

スコットランド文芸復興運動

**Pan-Celticism in Scotland in the 1880s and the 1890s
towards the Scottish Renaissance**

発表者 米山 優子

スコットランドでは、1880年代にスコットランド・ゲール語への肯定的な態度の醸成を促す動きが相次いで見られる。スコットランド・ゲール語の文化を奨励する組織の設立、大学のスコットランド・ゲール語学科とその主任教授職の創設、スコットランド・ゲール語に関連する話題を扱う雑誌の創刊、スコットランド・ゲール語の祭典「ロイヤル・ナショナル・モード」(Royal National Mòd)の開催など、これらの動きに共通するのは、ハイランズに限定されていたスコットランド・ゲール語を他のケルト文化圏とつながるための手段にしようとした点である。特に、モードのモデルとなるウェールズ語の祭典アイステズヴオッドを存続させてきたウェールズと、19世紀末から文芸復興運動を展開して顕著な成果を収めたアイルランドとの交流が重視された。

1920年代にスコットランド文芸復興運動を主導したヒュー・マクダーミッドは、「汎ケルト主義」をスコティッシュ・ナショナリズムと連動させ、「ケルト的連帯」をより広い文脈で捉えようとした。本発表では、1880年代～1890年代のスコットランドにおける「汎ケルト主義」の動向を整理し、スコットランド文芸復興運動とどのような関連があるのか検討する。

研究発表 1

現代ウェールズ語の動詞的形容詞による名詞修飾

——他言語での過去分詞による修飾に対応するものを対象に

How to modify nouns by verbal adjectives in Welsh, corresponding to past participial noun-modification in other Indo-European languages

発表者 浅野 千咲

本発表は現代ウェールズ語で「～される / された N」はいかに表されるかという関心を始点に、現代ウェールズ語における動詞的形容詞 (verbal adjectives / ansoddeiriau berfol) による名詞 (N) 修飾について考察する。

多くの印欧語は分詞 (participle) によって名詞を修飾するという方略をもつ。ところが現代ウェールズ語は現在 / 過去分詞をもたない言語であるとされ、多くの文法書でも分詞の項目が存在しない。本発表は第一に、先行研究内ではどのような観点から現代ウェールズ語が分詞をもたないと判断されているかを「派生」と「屈折」のちがいに着目しながら検証する。

第二に本発表は特に過去分詞による名詞修飾に着目し、他の印欧語では過去分詞を用いてなされる名詞修飾が現代ウェールズ語ではどのような形式によって行われるか調べた結果を報告する。関係詞を用いる場合を除けば、ウェールズ語では主に形容詞化接辞 *-edig* によって動詞から派生させた形容詞を用いる場合と「*wedi* 'after' + 代名詞の所有形 + 動名詞」という迂言的な構造を用いる場合とがみられ、この2つの形式には生産性にちがひがあること、および両者のあいだに意味的差異が認められる場合があることを提示する。

研究発表 2

ケルト美術工芸品の彩色に関する一考察(縄文・弥生との比較を交えて)

A study on coloring Celtic arts

>> and crafts -with a comparison Jomon and Yayoi period -

発表者 秋山 肇

東京都美術館で1998年に開催された「ケルト美術展」での展示品から土器・彩色土器14点を対象として色彩の観点からケルト文化を考察する。制作年代は紀元前5世紀から紀元1世紀の間とされており、チェコ・フランスおよびスペインに跨る大陸ケルトが遺した文化財である。ギリシャ・エトルリアとの交易による影響を受けつつケルトの独自性を獲得したというヤーコプスタール(Jacobsthal)の古典的認識を踏まえた選択であることが伺える。

スペインのソリア・ヌマンティーノ博物館所蔵による水差しは調教師と馬が同色(茶色)の顔料で筆書きされている点で特徴的である。制作された時代(紀元前1世紀)には既にローマの支配下にあったが、装飾が非ローマ的であるという理由で選定された。フランス、クレルモン・フェランの地方考古局所蔵による彩色土器は近年(1991年)に発見されたものであり、動物を曲線幾何文様でデフォルメした「ケルトの特徴が顕著な彩色土器」として紹介されている。発表当日には東京国立博物館所蔵の縄文・弥生土器コレクションとの比較も行う。

研究発表 3

In Cath Cathardaに於ける叙事詩的直喩の創造的模倣

Emulation of Epic Similes in *In Cath Catharda*

発表者 長島 真以於

中世アイルランドでは、11-12世紀にかけて、古代ローマの異教ラテン語叙事詩3篇(ウェルギリウス『アエネーイス』、ルーカーヌス『内乱』、スターティウス『テーバイス』)が相次いで俗語に訳された(それぞれ、Imtheachta Aeniasa[アエネーアースの冒険]、In Cath Catharda[内乱]、Togail na Tebe[テーベの陥落])。これらはいずれも、時には原典を大幅に省略し、時には原典に見られない情報や描写を加えた散文の翻案作品であるが、その中でも、今回検討するIn Cath Cathardaは、ルーカーヌスの叙事詩的直喩をアイルランド語で再現するという難業に数多く挑んでいることが知られている。しかしながら、その多さゆえか、はたまたしばしば"rhetorical epic"と評される原典の難解さゆえか、他の2篇とは異なり、In Cath Cathardaに於ける叙事詩的直喩、ひいてはその修辞学的側面の研究は未だ十分に行われていない。

本発表では、まず、ルーカーヌス『内乱』第1-7巻に含まれる叙事詩的直喩63点について、翻案者の対応を類型化し、他の翻案作品と比較した際のIn Cath Cathardaの特異性を検討する。続いて、再現が試みられた直喩、および原典にない、独自に挿入された直喩を複数取り上げ、翻案者の文体、典拠、獨創性、意図、並びに他の翻案作品や伝承文学との関わりを考察する。

研究発表 4

J. R. R. Tolkien の「不死の樂園」再考

J. R. R. Tolkien's Paradise in the West

発表者 辺見 葉子

アイルランドのイムラヴァの伝統を汲む『聖ブレンダンの航海』は、「地上の樂園／聖人に約束された地」を西方の海に位置し、西方への航海により辿り着ける地として描いた。これは創世記における「地上の樂園／エデン」を東方の果ての地として中世末まで地図に書き込んだ伝統の「ケルト的」変奏と見なされる。Tolkien が『聖ブレンダンの航海』を語り直したImramでは、Tolkien自身の神話のコスモロジーがいわゆるflat earthからspherical/round earthへと転換したことに伴い、西方の「地上の樂園」はこの世の地表から消え、「straight road」と呼ばれる架け橋を通じてのみ到達可能だとされている。本発表では、Tolkienの西方の「不死の樂園」は、『聖ブレンダンの航海』およびアーサー王物語におけるアヴァロンにも通じる「ケルト的」イメージの表出であるという既存の認識を再考してみたい。